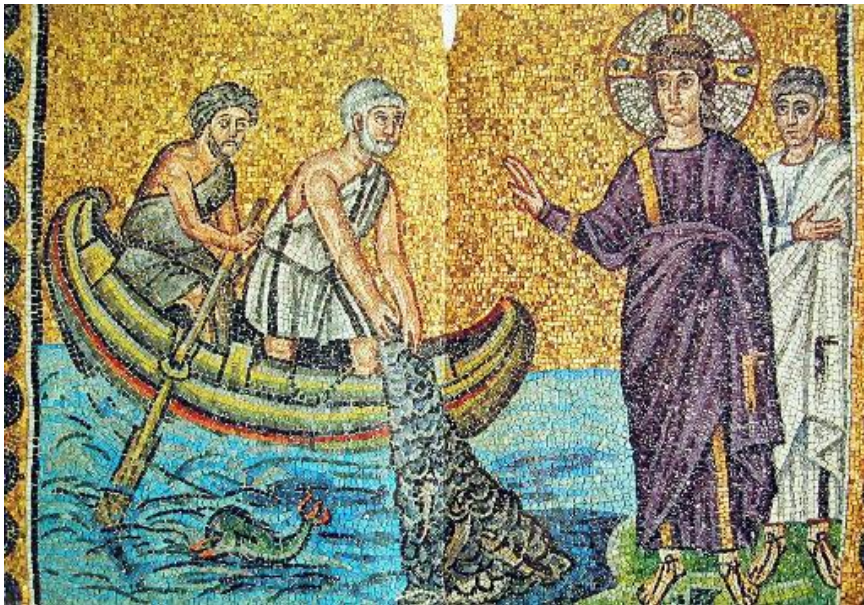


一粒の麦

ニュースレター

Vol. 16



イタリア・ラヴェンナ、サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂のモザイク画「弟子の召命」

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」

(マルコによる福音書 1 章 17 節)

2011. 7. 29

巻頭言

東日本大震災と叙階式

さいたま教区 司教 マルセリーノ 谷 大二

3月11日の東日本大震災が起こり、私は震災の対応に追われていました。16日、車で仙台から戻る途中、叙階式の準備をお願いしていた太田教会の金神父から電話がありました。

「司教様、震災で大変な時期ですが、叙階式を挙りますか？ 延期のお知らせを出すなら今のタイミングしかありません。」

「そうだった…」

すっかり助祭叙階式のことを私の頭から抜け落ちていたのです。式は翌週の月曜日なのに、です。ガソリンが手に入らない時期でもありました。多くの人が集まってお祝いをするのはばかれます。しかし、ふと頭をよぎったのは、助祭叙階を受ける予定のトアン、ホアン、佐藤、姜の4名の神学生の顔とカラダ(体)でした。

「これは使える！」

助祭は司教の手足となって働く役割を担うこととなります。この4人ばかりでなく、坂上、山口、高橋、尹、高瀬5名の神学生がいます。日本語勉強中のホルへもいます。叙階式と選任式を予定どおり挙行して、助祭、神学生をボランティアとして派遣しよう。

「金神父さん、やりましょう。ただし、お祝いごとは止めて、叙階と選任式だけにします。」

というわけで、3月21日、4名の神学生が助祭叙階、他3名が祭壇奉仕者、朗読奉仕者選任を受けることになりました。多くの信徒、司祭もガソリンのない中、叙階式に参加してくれました。

叙階式の中で、「助祭、神学生は全員、6時に教区事務所に集合」という召集命令。22日、早朝、助祭、神学生の10名は3つの班に分かれ、鹿島、日立、水戸の教会にボランティアとして派遣されました。彼らは、茨城県被災地の被害調査、信徒の安否確認の訪問、各市の社会福祉協議会との連絡、教会の災害普及の手伝いなど、ボランティアの先遣隊としての役割を見事に果たしてくれました。また、被害調査で訪れたいわき市とのコンタクトもとってきました。

4月になって6名は神学校に戻りましたが、ホアン、トアン、尹の3名は夏まで神学校を休学して、湯本サポートステーション(福島県いわき市)でボランティアを継続することになりました。そして、今年神学校を受験する予定の永島もそのボランティアに加わることになりました。

3月21日の叙階式、選任式。震災直後でしたが、私にとっても神学生にとっても、印象深いものになりました。そして、ボランティアで参加した神学生たちのたくましさや一人ひとりの優れた個性を改めて感じさせられました。きっとみんな素晴らしい司祭になると私は確信しました。

神学生たちのためにお祈りください。そして彼らに続く神学生が生まれるように祈ってください。

神学生より皆様へ感謝をこめて

いま

神学科4年(助祭) ルカ 姜^{カン} 玫周^{ミンジュ}

「一粒の麦」の皆さん、お元気ですか。私たち神学生は、いつも変わらない皆さんのお祈りや援助に支えられて、自分の召命の道を一步一步進んでいます。感謝しています。特に今年、私は叙階という大きな恵みをいただきましたので、改めて感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

今年2月23日から3月9日までの2週間、多くの方々のおかげでイスラエル巡礼に行くことができました。この機会をお借りして、援助して下さった方々にも感謝を申し上げたいと思います。

そして、今年3月21日には太田教会で、他の3人と共に、助祭叙階という大きな恵みをいただくことができました。日本に来てから、たくさんの方々からの応援をいただいてここまで来ましたので、いくら感謝しても足りないと思います。しかし、皆様もご存知のように、3月11日、日本に大きな試練がありましたので、叙階という恵みをいただくことに、ただうれしいという気持ちだけではない、複雑な気持ちがありました。叙階式の中で、司教様は助祭の本来の役割である「奉仕」について話されました。そして、新助祭4人と神学生4人、志願者2人、合計10人の神学生たちが、被災地である茨城に送られました。その後、助祭たちは神学校のプログラムとして2週間のボランティアをさせていただきました。その中で今(6月)も被災地で奉仕している仲間たちがいます。彼らにも感謝と応援を送りたいと思います。

イスラエル、震災、叙階。どれも一生に一度あるかどうかというような大きな出来事が、この春、与えられました。混乱しています。その中、不思議な記憶があります。ボランティアに行ったいわき市のある海岸で、砂浜と住宅地を区切る堤防に立ったことがあります。その時、不思議な光景を目にしたのです。右側は海と砂浜で何もなかったかのような平穏な風景でした。しかし、左側には地震と津波で破壊された瓦礫の山がありました。その耐え難い、吐きそうな気持ちの違和感が、今も自分の中にあることを感じます。

ユダヤ人とパレスチナ人の葛藤の中、全世界から巡礼に行く大勢の人がいます。自分の信仰を目で確かめることができる素晴らしい場所でありながら、一方では、葛藤や憎しみ、緊張感が満ちている都、エルサレム。震災で皆が悲しみ、辛い思いをしている中での叙階式。そして、車で何時間か走れば震災で辛い思いをしている人々がたくさんいることを目で見ても知りながらも、実際には何もなかったかのように普通に生活している自分。

その矛盾のような違和感の中で、復活節を迎えました。死と生、辛さと喜び。復活という出来事こそ、あの違和感に満ちている気がします。イエス様は、いつもあなたがたと共にいるよと、いま、一緒にいるよと、言われました。

いまを一緒に過ごしている皆さんに支えられて、力をいただいて、いまを生きていきたいと思います。ありがとうございます。今後もよろしく願います。

助祭叙階を受けて

神学科4年(助祭) パドアのアントニオ 佐藤 智宏

一粒の麦の会員の皆様、ご無沙汰しておりました。今年の3月11日、忘れもしない東日本大震災という出来事の後、約10日後に、神の恵みのうちに、何とか無事に助祭として叙階されました。これまで会員の皆様には多大なご支援を継続して賜ったことに、まず心より感謝申し上げます。引き続き、私たち神学生が司祭職への道を歩むことができるよう、祈りとご支援のほどをお願いしたいと存じます。

約5年間の日本カトリック神学院(旧東京カトリック神学院を含めて)での生活の実りでもある助祭叙階式は、感極まるものがありました。東日本大震災の10日後という、大変厳しい条件下での太田教会(群馬県)での叙階式でしたが、ガソリンも手に入りにくい状態が続いていた時に、当日は司教様も電車で太田教会に来られ、他の司祭、信徒の方々もできる限りの範囲において叙階式に参加してくださいました。この状況においても、400人以上の参加者がおり、聖堂が人であふれている状態を式の進行の間に眺めながら、「本当に神の恵みが注がれている時だ！」と実感しました。

この叙階式のすぐ次の日、谷司教様の号令によって、4人の助祭に叙階された私たちは、茨城県と福島県の震災の被災地の教会を訪問し、約1週間滞在しながら、各自ボランティア活動をしながら、必要があればサポートセンターを立ち上げるという役割をすることになりました。私は水戸方面に向かい、水戸教会に滞在しながら、周辺の被害の状況を見るとともに、教会の大谷石で造られた壁の崩れたブロックをトラックで運搬するなどの活動をしました。

このように、助祭としてさまざまな労働と奉仕に励みつつ、自分のこれからの司祭職に向かう歩みがどのように展開していくのか、自分自身のたくさんの弱さも含めて不安もありますが、父なる神と主イエスが見守ってくださる、一緒にこの道を歩んでくださっていることに信頼を置いて、また皆様の助けをいただきながら、最後まで「完走」することができるよう、この1年間、助祭職を務めて参りたい所存です。どうぞこれからもよろしくお願いします。

ボランティア

神学科4年(助祭) 洗礼者ヨハネ グエン・ゴン・ホアン

皆さん、こんにちは！ いかがお過ごしでしょうか。3月21日、私は、谷司教様の按手により、助祭叙階の恵みをいただくことができました。これまで皆様に物心両面で支えられ、私がこの様な形で皆様にご報告できますことを心から神様に感謝したいと思います。

さて、助祭叙階式の説教の中で、谷司教様が「助祭が四人いるので、私の手足となって、東日本大震災で被災された方のためにボランティアしてください」と言われたとき、私は司教様のどの部分になるのかと考えていました。私はサッカーをやっていたので、司教様の足となって走ろうと思いました。

22日から一週間は、さいたま教区の神学生と青年11人で、茨城県へ向かい、それぞれ水戸、日立、鹿島と三カ所の教会に分かれました。私は鹿島でしたが、最初は右も左も分からないまま過ごしました。

浦和へ戻ってすぐ東京の神学院に移り、今度は全国の助祭団だけで仙台へ行きました。仙台のボランティアセンターに行って登録し、ある病院で作業してきました。ここで、自分には何ができるのかが少しずつ解ってきました。さいたま教区の助祭団は三日間だけの滞在で、一足早く浦和の教区事務所に戻ったところ、谷司教様から福島県いわき市湯本教会に立ち上げられたさいたま教区サポートステーションに直ちに派遣されました。それからの二ヶ月の間、湯本の周辺にあるいろんな避難所へ行き、傾聴したり、支援物資を届けたり、炊き出しをしたり、あるいはいわき市のボランティアセンターに行って、いろんな所から来ているボランティアの人たちと一緒にがれきの片付けや泥かきをしました。

4月11日にすごく大きな余震がありました。12日、私が湯本教会へ行ってみると、折角復旧していた湯本教会の周辺はまだ断水していて、地元の人たちはとても不安な様子でした。また、湯本教会の隣にある給水所では、8時から水が配給されるとラジオで聞いて、住民たちが続々集まっていたのですが、実際には、いつまで待っても水は出ませんでした。並んでいた住民の人たちは、本当にいらだちを隠せない様子でした。そこで、私たちさいたま教区からのボランティアチームはいわき教会の神父様に電話して確認したところ、何と、いわき教会では水が出るということです。私たちは早速給水所に行って、並んでいる人たちの容器を預かり、軽トラに乗せ、いわき教会へ何度も水を汲みに行き、人々にお渡しすることが出来たのでした。

それから、3日目、周辺はまだ断水していましたが、不思議なことに、湯本教会では水が出てきたのです。他のボランティアの人が買いに行った長いホースを台所から繋いで水を配給しました。また、湯本教会のちょっと北の方には山があって、そこには年配の方々が住んでいて、やはり、そこも断水していることを知りました。年配の方々には足がなく、給水所まで来るのがとても大変と分かりました。私たちはいろいろ知恵を出し合って、ステーションの費用で300リットルのタンクを買ってもらい、そのタンクにいっぱい水を入れて軽トラに乗せて、水を届けに行きました。それは喜んでくださいました。

私の次の役割は避難所に行って、傾聴ボランティアとして活動することでした。最初に行ったのは、江名中学校の体育館に設けられた避難所でした。80人以上の人たちが避難していました。最初は挨拶、そして、正座して、その方と同じ目線で「いかがでしょうか、今日はまだ寒いですね、とか、今日はとても良いお天気ですね」というふうに声をかけ、そこから少しずつコミュニケーションを取りながら話していきました。

そして、私が一番気を付けたことは、余震のことや原発のことについてはできるだけ触れないようにしようということでした。しかし、中には話しの中で地震や原発について自分から話す人もいましたけれども、そのまま聞いてあげ、特に、的確な情報を知っているならば、その人の話に合わせてながら、傾聴することが大事ではないかと、私なりに感じました。傾聴の難しさを本当に実感させられました。震災で何もかも失った人たちを訪ねて行って、私に傾聴などできるのか、と最初は頭の中が真っ白になりましたが、何度も訪れるうちに、少しずつ、いろいろな方と顔見知りになり、次第にコミュニケーションができるようになりました。

傾聴してみて、私が何よりも一番嬉しかったことは、話の中で少しでも笑ってくださったときでした。あるおじいちゃんと話していて、そのおじいちゃんが私に「一ヶ月ぶり笑ったよ、本当にありがとう」と言ってくれました。そのとき、傾聴して良かったなあと思いました。自分の何気ないつまらない話で笑ってくれたことは、本当に嬉しいことであり、自分も励まされたと感じました。

私がこのように元気でボランティア活動できたのは皆様の日頃からの支えであり、皆様の祈りに支えられて今の私があるということに本当に心から感謝いたします。これからもどうぞよろしく願いいたします。

孤独を愛すること

神学科4年(助祭) 洗礼者ヨハネ ゲエン・ゴクトアン

今年も元気な姿で皆さまにご報告出来ますことをまず神様に感謝いたします。

私は3月21日に助祭叙階の恵みに与りましたが、翌日の22日には、ガソリンを確保するために朝4時から神学生たちと車の中で待ちながら、その日から今日まで湯本教会でボランティア活動をして来ました。そのときの貴重な体験を皆様にご報告させていただきたいと思います。

最初は、灯油、ガソリンもなく、電気、ガス、水道なども使えない状態でした。その後も水や食べ物などの物資が足りなくて、埼玉から物資を運ぶことが多々ありました。その後、物資ボランティアが終わり、今度は傾聴ボランティアが中心となりました。

傾聴ボランティアをする中で、私はあるお年寄りの女性から大切なことを学ぶことが出来ました。それは「孤独を愛すること」でした。私はよくいわき市中央台公民館で傾聴ボランティアをしていました。被災者のいろんな経験を聞いたり、足りない物資を届けたり、マッサージをしたりして和気藹々と楽しんでいました。その中で、ご主人を亡くし、息子さんが津波に流され、甥や孫の情報がないままという足の不自由なその方に出会いました。会うたびに、その方の「命令」で、足のマッサージをしながら会話をしていました。話しているうちにその方は「神父さんは結婚できないことは寂しいことだっぺ」「でもなあ出来るだけ寂しいことを感じた方がええ」と言ったのです。不思議に思って、「どうしてですか？」と聞くと、そのおばあちゃんは「わたしや、主人もなくなったし、息子もいない。甥や姪も行方不明で、家も住める状態じゃないけれど、寂しいときとか、人生はわびしいと強く感じるようになったよ。でも茶道をやってきて良かったよ」と答えてくれました。おばあちゃんは続けて「自分は空しくありたくないとか、空しい一日でありたくないとか、空しい人生を終わりたいとか感じることで誰だっぺあるっぺ。それは自分の思い通りにならないときや自分の理想に近づけないときなどにこのような気持ちを感じるからよ」「だから人間は、おいしいものを食べたり、買い物をしたり、長電話をしたり、旅行に行ったりするっぺ。若い時、わたしや気晴らしに逃げ込んだこともこのさびしさやわびしさがあるからよ」「でもね、茶道や俳諧連歌の世界では『侘びは、何もない簡素なただずまいの中に深い趣きを感じる』という境地があるし、寂びは物事の無常さやはかなさを感じながらも何かその中に滲み出てくる暖かなものを感じたり、それをいとおしむ境地もあるわけよ」「アンちゃんも若いから感じられないかもしれないが、寂しいときや空しい時、気晴らしに逃げ込むのではなく、そのわずかな時間の中でとどまることが必要なときが来るよ」「その時、違う人生の味が味わえるよ」

私は傾聴ボランティアでありながら、そのおばあちゃんから力強い心の糧となる言葉をいただいたようで、大きな元気をいただいて、湯本ステーションで毎日ボランティア活動を続けています。

よく福島県以外の方から、人生は空しいとか寂しいとか、福島県に行って何かしたいけど家庭で忙しいとか、会社で忙しい、という声を聞きます。しかし、私としては、忙しいとか、行きたいけど行けないという方には、孤独な被災者の方がたくさんいます、このおばあちゃんのように、そこに留まって、ともにその寂しさ、侘びさを味わいながら、目には見えない“愛のボランティア”が出来るのではないのでしょうか、とぜひお伝えしたいと思っています。

いよいよ最後の年になりました。

神学科3年 アシジのフランシスコ 坂上 彰

「一粒の麦」会員の皆様、いつも私共を様々な形で支えて下さり、本当にありがとうございます。

ちょうど3年前、東京と九州の2つの神学校が合同した最初の年にこちらに来てから、早いものでいよいよ福岡キャンパス最後の年を迎えております。何もかも水と油ほども違う2つの神学校は当然のことながら養成カリキュラムも違っており、同じ学年でありながら九州の神学校から来た神学生は既に履修済みの科目を、東京から来た神学生は未履修だったりということもありました。そのすり合わせのために、去年などは年間で最大23教科も履修しなければならなくとも大変でしたが、今年はその分少し科目数も減り楽になりました。

さて去年は、その大変な履修教科の一覧を皆さまにご紹介させて頂きましたが、今年は、神学科3年生にならなければ絶対に受講できないという3つの科目をご紹介します。

【典礼学Ⅳ：典礼と時】

入学以来、「典礼学Ⅰ」の入門から始まって、エウカリスティア・7つの秘跡と準秘跡等を学んだ最後に、典礼の総決算として受講するのがこの学科です。

『救いの出来事は、父の時[預言の時]・子の時[ことばの時]・聖霊の時[教会の時]という

3つの時の流れに沿って成立し、典礼はこれを“しるし”の下に秘跡的に記念する』

ことから、《主日と週日》、《典礼の季節》、《年間と7つの主の祝祭日》、《聖人への崇敬》、《時課の典礼(教会の祈り)》について学びます。

【秘跡執行の実践】

司祭不在時の集会祭儀や結婚式、葬儀等の司式を、神学生が交代でシュミレーション形式にて行う授業です。ユニークな点は、結婚式なら新郎・新婦・立会人を、葬儀なら遺族を同級生が務めることです。但、幼児洗礼式の場合は、神学生が赤ちゃんの代役をやるのは無理があるので、代わりに人形を使って行います。

【神学研究論文】

これが最も厄介な(?)科目です。自分で決めたテーマの神学論文を、A-4で20枚以上書くというもので、私は『差別とカトリック神学』をテーマにしています。締め切りが11月30日なので、皆様がこのニュースレターをお読みになる頃、私は「ヒューヒュー」言いながら書いていることと思います。

以上、私が今年受講している授業の一端をご披露させて頂きました。このように日々勉強出来るのも皆様のお陰と、心から感謝申し上げます。

お祈りください！

神学科3年 パウロ 尹 兌榮^{ユン テヨン}

さいたま教区の信者の皆様、こんにちは！

今年3月から休学ということで、太田教会に来させていただいています神学科3年のパウロ尹 兌榮(ユン・テヨン)と申します。

休学が決まった2月からこの時期に何をしたらいいのかを深刻に考えることになりました。元気に生活すること、聖地巡礼をすること、他の外国語を学ぶことなど。もちろん神学院から離れていても神学生として自分の召命を守り、もっと強めることは何よりも重要なことだと思いました。ところが、このような私の計画は、3月 11 日にかつてない東日本大震災が起きたことと同時に無駄になりました。さいたま教区の神学生の全員は司教様の命令(?)を受けて、被害地域に向かうことになりました。今でも教区の信者様だけではなく、他の教区の信者様、神父様、修道者たちが、被害の大きかったところでそれぞれの活動をなされています。私自身もその中での働き手として助けになろうとしていますが、大自然の力を見ながら無力を感じざるを得ません。率直に、想像を絶する被害を受けた人々の悲しい心、悔しい心を見たとき、どんな助けになれるのか、慰めてあげることができるのかと私は自問しました。

ある日、いわき市にある避難所に自信がない表情で入りました。その中で一人のおばあさんが私に話してくれた一言が今でも心に残っています。避難所は不便な生活で、必要なものはあまりない、あなたたちが今一緒にいてくれて有り難うという話。むしろ私自身が癒された言葉でした。

大震災の傷がいつ治癒されるのかは分かりません。今も被災地の人々という限り、心を合わせて一緒にいるだけです。信者様、お祈りください！

無力な者を選ばれる神

神学科2年 フランシスコ 高橋 史人

さいたま教区の神学生の高橋史人です。昨年、福岡県福岡市にある、日本カトリック神学院の福岡キャンパスで神学科生として勉学に励んでいます。昨年度は福岡教区の西新(にしじん)教会で司牧実習をしました。今年度は福岡教区の光丘(ひかりがおか)教会で司牧実習をしています。

「所変われば品変わる」という言葉がありますが、関東と九州のように地域が異なると雰囲気も変わります。教会の雰囲気や司牧のあり方も違いが見られます。いろいろな違いがあることを学ぶ良い機会が与えられていることに感謝しながら福岡で生活しています。

今年3月に大きな地震を経験しました。その時は春休みだったので、さいたま教区の川越教会にいました。数日経って教区から連絡があり、さいたま教区内の被災地である、茨城県の太平洋沿岸へ、1週間ほどボランティアに行きました。私は水戸教会に行きました。水戸教会の神父さんたちやシスターたちは、震災の困難な状況の中でも、いつも明るく振舞い、たくさんの人たちに勇気と希望を与えていました。

4月に福岡に戻り、司牧実習先の神父さんや信徒の方々に、私のボランティア体験談を話すと、皆本当に自分たちの出来事のように話を聞いてくださり、神父さんは、「私も現地に行きます」と決意され、福岡教区の他の神父さんたちに声をかけ、仙台に向かいました。信仰と九州男児の誇りが一体化している感じでした。

神学校で神学を学ぶ中で、私たち神学生は今日本で起きている様々な出来事を受けとめています。神学は神さまについての学問ですので、他でもなくそれは愛についての学びです。私たち人間にとって本当に支えになることについて深めていく学びを今後も進めていきたいと思います。

私たち神学生が皆様の祈りや助けによって支えられていると感じながら、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に涙を流す生き方をより追求していきたいと思います。無力な者を選ばれる神を信じて、生きていこうと思います。

皆様、これからも私たち神学生をよろしく願いいたします。私たちも皆様のことを思い、祈り続けていきます。

困難な状況にある方々のことを思いながら

神学科2年 フランシスコ 山口 一彦

皆様、こんにちは。今年私は神学科2年になりました。司祭叙階までの神学校生活は順調ならば6年間ですから、その前半3年間、つまりちょうど半分をやつとのことで終えたところです。学年が上がる毎に勉強は大変になっていくのですが、若い仲間たちとの共同生活は楽しくて、まるで第二の青春時代を過ごしているような気分です。

さて、私も皆様と同様、大地震を体験いたしました。災害ボランティアにも行きました。しかし、4月に入ると福岡の神学院へ戻らなければなりません。「こんな時、象牙の塔にこもっていて良いのだろうか」という思いがありました。節電で薄暗い羽田を飛び立ち、福岡に着陸してみれば、そこでは照明が煌々と輝いています。「こっちは平和だなあ」というのが第一印象でした。それでも、九州の方たちとお話すると、皆さん、被災された方々のことを本当に心から心配されているのが伝わってきます。それぞれ、献金やボランティアなどで、「今自分にできること」を一生懸命考えて実行されています。私も、心は被災者から離さずに、神学生として課せられたことを精一杯務めることが大切なのだ、と考えるようになりました。

私たち神学生は、週末に近隣の小教区へ司牧実習に伺うことになっています。私は今年、熊本県にある「天使園」という児童養護施設に通っています。様々な事情で両親といつしよに暮らすことの出来ない子どもたち、2歳から高校3年生まで約80名が共同生活を送っている所です。そこで、神様のことについてお話ししたり、学校の勉強の補習をしたり、歌を歌ったりスポーツをしたり、遊んだりジャレ合ったりしています。子どもたちはみんな、50歳の私を「お兄さん」と呼んで甘えてきます。大人に裏切られて、心に傷を持つ子どもたちです。とにかく「優しいお兄さん」になって、楽しいひと時をいつしよに過ごすことにしています。

東日本の被災者の方々、天使園の子どもたち、困難な状況にある方たちのことを一生懸命思うことは、イエス様のことを思うことなのだと考えながら、日々の生活を送っています。

はじめまして

哲学科1年 ペトロ 高瀬 典之

本年度より日本カトリック神学院に入学させていただくことになりました哲学科1年の高瀬典之と申します。所属教会は茨城県の西ブロック、古河教会です。

私が、司祭の道を志したのはちょうど一年前のことでした。私は大学を卒業した後、障害者の就労支援をするソーシャルベンチャーで約5年間、営業や企画、お仕事を紹介するキャリアコンサルタントなどの仕事をしていました。

その仕事を選んだのは大学時代に学んだ哲学や神学の勉強を通して、卒業後は社会生活や仕事の中で自分の生き方を少しでもキリストの生き方に近づけていけたらという思いからで、仕事はつらいことや苦しいこともたくさんありましたが、多くの尊敬できる方との出会いや、貴重な体験をいくつもさせていただき、とても充実したものでした。

しかしながら、会社で働いていく中で、どうしても越えることが難しい問題があることも知ることができました。それは、企業と利益の問題でした。心の底から困っている人、悲しんでいる人、生きる元気を無くしている人など、本当に助けが必要な人に対してサポートができないのです。また、仕事のストレスや日々の忙しさ、人間関係などから心に大きな傷を負った人がたくさんいることも知らされました。それらの現実とふれた時、私の心は言いようのない無力感に沈み、悩みました。そして、ある日、「こんな時にイエス様だったら、どうなさるだろうか。」と卒業以降あまり開けていなかった聖書を久しぶりに開きました。その後聖書のどの箇所を読んだのか、あまり詳しく覚えておりませんが、ただその時、私の心が熱くなり、司祭という生き方について考えさせられたことは、はっきりと覚えています。

神学院入学にあたっては、初めての共同生活ということで多少不安もありましたが、同級生や先輩、養成担当の神父様方の温かい助けのおかげで、とても充実した神学院生活をスタートすることができました。意志も信仰も弱いこのような私ですが、将来、キリストのように考え、話し、行い、愛することができるよう、初心を忘れず、日々の祈りや勉強、出会いなどを通して歩んでいきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

信徒の方からの声

召命への道

川越教会 トマス 米田 友義

いつの時代にあっても「取捨選択」という作業は人間にとって大切なことであり、同時にこれほど難しいことがないのではないのでしょうか。特にいろんな価値観がぶつかり合う現代では、何かを決めてその代わりに何かを捨てるのはよほどの覚悟がいります。進学や就職、結婚などもそうですが、その最たるものは司祭職ではないかと思えます。

司祭の道を選ぶということは司祭以外の道を捨てることであり、それはどんな立場の人にとっても簡単なことではないと思えます。召命とは神の呼びかけがあつて、かつその呼びかけに答えるという二つの働きのようですが、両方とも神の業を抜きにしては考えられません。もちろん司祭も人間ですから、それぞれに個性があり喜びや悩み、まして子羊を導く行動指針や司牧についての考え方は様々といってもよいのではないのでしょうか。司祭への道を選んだ動機、召命を著した書物を読みますと、両親や兄弟などの家庭環境と身近な司祭への憧れが最も多いようです。その意味で子どもへの信仰教育が将来の司祭召命へのキーポイントではないかと考えます。

話が急展開して恐縮ですが、私は医者之家に次男として生まれ親父から将来の医業を託されていました。それは誰から教えられるでもなく、私が医者になるのは当然のように家族全員が考えていました。いわば家庭環境がそうでしたし、医者はずっと世襲が多い職業です。しかし私は能力不足もさることながら、生来医者が好きになれなかったのです。というのは小さいころから親父の仕事ぶりを傍で見ていたからです。親父は生真面目な人で、雪深い冬のたとえ真夜中でも4、5キロ先の山に急患の往診に長靴を履いて歩いて出かけました。私にはとても真似ができませんでした。今でもその姿が目に焼き付いています。召命と世襲を比較するわけではありませんが、私は受験に見事に失敗、お陰で家族から解放されて自らの道を歩むことができました。私は親父の呼びかけに幸か不幸か答えることができなかったというわけです。

召命に関する話題をもう一つ。私はそれまで召命とは司祭になれる人にだけ神から与えられる特別なお恵みぐらいにしか考えていなかったのですが、実はその解釈は間違いであることを知らされました。それは告白のときです。そのとき壁を隔てた向こうの声はこう言いました。「聖職者に限らず人はみな神から召

し出しを受けている。あなたの場合、生活の中心は家庭であり、その家庭を中心とした社会との関わりの中で、人を救いに導く信徒としての使命を果たすこと、それがあなたの召し出しである」と。まさに目からウロコの感がありました。それ以来、私はどんな人にも神から与えられた役割と使命があつて、その召し出しを忠実に実行することが最も重要なことと考えるようになりました。

それにしても神学生時代は一にも二にもひたすら忍の一字と聞いたことがあつて司祭への道は困窮を極め大変なようですが、一方ではもう一度人生をやり直すことができるとしても同じ司祭の道を選ぶという司祭の話を知ると私も幸せな気分になって、そういう司祭がひとりでも多くいてくださることを願うばかりです。



養成担当者より

ご挨拶

日本カトリック神学院 養成担当司祭
フランシスコ・ザビエル 中嶋 義晃

2011年4月1日付で、日本カトリック神学院に養成担当者として着任いたしました、さいたま教区の中嶋義晃と申します。気候が穏やかで景色が美しく、2006年にはニューズウィークで世界の発展都市ベスト10のひとつに選ばれた、この素晴らしい福岡県という地で過ごせることの幸せをかみしめております。また、このような素晴らしい任務を与えて頂き、心から感謝しております。この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

人生を語るほどの年齢ではありませんが、光陰矢のごとしという言葉、最近本当に実感しております。2004年に、さいたま教区カトリック大宮教会での司祭叙階後、日光・今市・鹿沼・上三川教会、上尾教会、川口・浦和・朝霞教会の担当・協力をしてきました。あつと言う間の7年間でした。このささやかな経験や様々な出会いを通して、豊かな恵みをいただくことができました。

しかし、私には知識や経験、能力など誇れるものなど何もありません。ですから、聖霊の働きに頼るしかありません。「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(ローマ人への手紙8章26～28節)ここでの務めが神の計画でありますように……。

さて2009年に、日本司教団によって東京カトリック神学院と福岡サン・スルピス大神学院が統合・合併し、日本カトリック神学院となってまだ間もない時期でもありますので、よりよいものを目指すために改善していかなければならないことがあるかもしれません。また、絶えず神の御旨をさがし続けなければなりません。そのために日本司教団の協力者として、養成に携わってくださっている司祭や様々な形で奉仕してくださっている方々と共に、聖霊の助けのもと日本カトリック神学院を築いていけるよう願っています。

この1年間で、神学院の神学生の皆さん、神学生を支えてくださっている皆様にとって幸せな1年間になりますように心からお祈りいたします。また、皆様のお力添えをいただきますようお願い申し上げます。



感謝と報告

さいたま教区 事務局長
ヘルムート・アウグスチヌス 矢吹 貞人

さいたま教区司祭を目指す神学生たちの養成のために、「一粒の麦」会員となったださり、いつも祈りと献金による温かいご支援をいただき感謝いたします。お陰さまで、この春もまた(3月21日)、4名の神学生たち(姜 玟周、佐藤 智宏、グエン・ゴク・トアン、グエン・ゴン・ホアン)が太田教会において助祭叙階の恵みを受け、司祭への道をさらに一歩前進いたしました。思いもかけない東日本大震災の直後だったため、次の日から救援活動のため日立、水戸、鹿島へと派遣され、これまでに例を見ない奉仕の体験を重ねる日々となりました。

さいたま教区神学生は現在9名、そのうち 4 名は福岡キャンパスで、5名が東京キャンパスで学びの日々を送っています。順調に行きますと来春には4名の神学生(助祭)が司祭叙階の恵みを受け、また 2 名の神学生が助祭叙階の恵みに与ることでしょう。

2010 年度の「一粒の麦」の会計報告は次の通りです。

会員数:247名(62名の減)

献金総額:6,096,552 円(566,154 円の減)

本当にありがとうございました。これまで通り、神学生養成費、神学校分担金などに使わせていただきました。

現神学生に加え、さいたま教区司祭への道を希望する若者が今年も続きます。このように召し出しが続いていることを皆様と共に神に感謝したいと思います。したがって、教区としては、当然に生じる養成のための費用の増加にも引き続き努力を続けなければなりません。「一粒の麦」は 2009 年度、会員数も献金総額もそろって増という結果となりましたが昨年度(2010 年度)は献金総額が減となってしまいました。どうかお力をお貸しください。所属教会の親しい信徒の方などでまだ入会されていない方がありましたら、ぜひお勧めください。

なお、ニュースレターなどが確実に届きますよう、転居・電話番号の変更等がありましたら、ご面倒でも、さいたま教区事務所まで必ずお知らせください。

暑さ厳しい日が続いております。皆様のご健勝を心からお祈りいたします。

皆様の上に神様の豊かな祝福がありますように。

一粒の麦感謝ミサ

— 谷司教司祭叙階銀祝 —

日時 2011年10月10日(月祝)13:00~

場所 カトリック浦和教会

司式 谷 大二 司教



発行日 2011年7月29日

発行 カトリックさいたま教区

編集責任者 矢吹貞人

編集 さいたま教区神学生一同

住所 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 6-4-12

さいたま教区事務所内

TEL 048-831-3150 FAX 048-824-3532

代表 さいたま教区 司教総代理 猪俣 一省神父

振込先 郵便振替口座番号 00180-0-358503

加入者名 「一粒の麦」